

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	サービス・ラーニングにおける留学生の学びと変化 : 地域のこども食堂でのサービス活動を通して
Author(s)	菅川, 裕希
Citation	広島大学日本語教育研究 , 33 : 24 - 31
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53752
URL	https://doi.org/10.15027/53752
Right	Copyright (c) 2023 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	



サービス・ラーニングにおける留学生の学びと変化

—地域のこども食堂でのサービス活動を通して—

菅川裕希

International Students' Service Learning Through Volunteer Activities at a Children's cafeteria

Yuki SUGEKAWA

キーワード：サービス・ラーニング (SL) , サービス活動, こども食堂, 人とのつながり, 居場所

1. はじめに

近年、大学ではアクティブ・ラーニングの推進や大学の地（知）の拠点化の流れを受け、サービス・ラーニング（以下、SL）が注目を集めている。SLとは「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」（文部科学省 2013）である。

SLは体験学習の一手法であるが、Furco (1996)は他の体験学習との違いを、サービス活動と学びのどちらに重点があるか、サービス活動の利益が与え手と受け手のどちらにあるか、という観点を用いてSLの特徴を説明している（図1）。

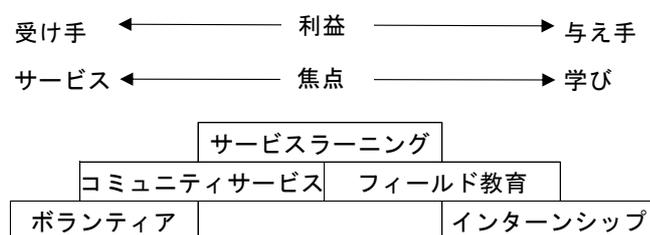


図1. それぞれのサービスプログラムの特徴 (Furco 1996)

ボランティア活動はサービスすることに重点が置かれ、サービスの受け手が利益を得るが、インターンシップは学生の学びに重点が置かれ、学生が利益を受ける。それに対して、SLはサービスの利益が与え手と受け手双方にあり、サービス活動と学びのバランスが取れている。そのため、教育の一環として行われ、学生がより深い学びを得るために、学生

自身が何を学んだのか、などの振り返りの機会を重視していることが特徴である。

日本語教育におけるSLの実践は少しずつ行われるようになってきた（黒川 2009；黒川 2012；土居・井手 2015；井手・土居 2016；土居・井手 2017）。

黒川（2009）はサービス活動を行った留学生2人の分析から、言語知識的側面のみならず、社会文化的側面や責任感、進路選択、「共生」に対する意識の深化という面でも学習効果が見られたことを報告し、日本語教育におけるSLの可能性を提言している。その提言を踏まえて、黒川（2012）は高齢者施設での授業実践から、言語的側面よりも心理的側面への学習効果を報告している。

一方、SLを導入した授業実践において、土居・井手（2015）は客観的に学生自身を振り返る難しさを指摘しており、学びや気づきを深めるための工夫の必要性を述べている。その方法として、学習者が各自の「具体的な目標や課題」（井手・土居 2016）を設定することや、「何を学ぶか」という問題意識（土居・井手 2017）を持たせることを提言している。

また、島崎（2016；2018）は、地域住民と留学生・日本人学生の国際共修をめざす、仙台すずめ踊りの実践を行っている。島崎（2016）は、日本文化を批判的に見て学ぶことは、留学生により差があったことを課題としてあげ、内省の重要性を指摘している。それを受け、島崎（2018）は文化についてディスカッションを行い、観察する際に注目する焦点やものを見る切り口を与えたことにより、留学生の内省の質が変わり、深い気づき、学びが起こったと報告している。島崎（2016；2018）は、SLの概念を用いた実践ではないが、振り返りの方法の1つとして応

用できると考える。

このように、SLの教育方法は、言語的側面だけでなく、社会文化的側面や心理的側面への学習効果が期待される。大学での留学生教育における実践はまだ事例に限られており、留学生を対象にしたSLの可能性については、さらなる実践報告が求められる。

特に留学生の日本語教育に携わる教員や支援者にとっては、学生にどのような気づきが起こるのかや、学びを深めるための支援のあり方などについての報告は貴重な資料となろう。

本稿は、SLの考え方をもとに、日本事情科目に取り入れた、留学生によるこども食堂でのサービス活動の実践報告である。こども食堂は、「食」を通じた、子どもや多世代の地域住民の居場所や交流拠点として、近年社会的な関心を集めている。SLの実践報告は地域の日本語教室、病院、高齢者施設、学童保育クラブなどが中心であり、こども食堂のような場を対象にした研究は見当たらない。

こども食堂とは、子どもが一人でも行ける無料、または低額の食堂である(湯浅2017)。こども食堂が作られた背景には、経済や雇用状況の悪化、非正規雇用やひとり親世帯増加による貧困層の増加があるが、こども食堂の多くは、地域交流の場、子どもの居場所作りという目的をもち運営されていることが報告されている(農林水産省2017)。「居場所」はさまざまな定義があるが、全国こども食堂支援センターむすびえは「「自分らしくいられる場所」で、子どもやその親、そして地域の高齢者などが周囲を気にせず、ありのままの自分を出せる場所、ありのままの自分を受け入れてもらえる場所」と定義している。こども食堂という名前ではあるが、「どなたでもどうぞ」と誰にでも門戸は開かれており、子どもからお年寄りまで幅広い世代が集まる場所となっている。

しかし、生活の中で誰が経済的困窮の状況にあるのか外見から判断できないため、実際には貧困を身近な問題と感ずることは容易ではない。このような認識されにくい社会課題について、授業で資料を読み学んだとしても、本当に理解したとは言えない。

そこで、筆者はこども食堂でのサービス活動を通して、こども食堂を取り巻く環境や社会課題への理解を深めることができると考え、SLの概念を取り入れた。

本稿では、サービス活動の前後に留学生に対し

て実施したアンケート、活動報告書および最終レポートを分析することによって、留学生の学びや気づきについて報告し、振り返りの方法やこども食堂でのSLの導入の可能性を探る。

2. 実践の概要

2.1 サービス活動の受け入れ先

今回、サービス活動を行ったこども食堂Xは、小学校の前の公園にある集会所で、週1回毎週金曜日の16時~19時まで食事を提供している。ここでは高校生まで無料、大人は300円、お年寄りは200円で食事ができる。こども食堂代表を中心に、高校生・大学生から年配のこども食堂ボランティアスタッフが携わり、農家や企業、フードバンクからの食材の寄付を受け運営されている。ここは食事に来た子どもたちや地域の人、自社の畑で育てたキャベツを持ってきた大手企業の社員、野菜や調味料を寄付する地域の人、こども食堂を経済的に支援する人、こども食堂に関心をもった大学生たち、取材に来た新聞記者など、様々な人々が頻繁に出入りする。

2.2 受講者

受講者は、大学1年生の中国人留学生5人(女性、C1~C5)、ベトナム人留学生1人(女性、V1)である。日本語学習歴はC2、C3、C4、C5は日本語学校で2~3年である。V1は3年(国で1年半、日本語学校で1年半)、C1は3年(国の高校で2年、日本の高校で1年)である。V1、C1、C2、C3、C5は日本語能力試験N2に合格しているが、C4は未受験である。

オリエンテーションの翌週に、実践者は授業で扱うテーマと予定表を配布し、留学生にこども食堂のサービス活動への参加を提案した。「こども食堂」を知っている留学生はおらず、どのような場所なのか、何をするのかについて質問が出た。事前学習でこども食堂や居場所について学び、サービス活動前のアンケートでは6人中5人が関心を示したが、1人(C1)はどちらかというに関心がないと回答した。関心を示した5人は「どんな雰囲気か(C3)」「どのような人が訪れるのか(C2、C5)」「ボランティアはどうしてそこへ行くのか(C4)」「子どもが食事を食べる様子がかわいいから(V1)」という点に関心を寄せていた。また、サービス活動に参加する

目的は「こども食堂を理解する (C1)」「ボランティアを体験し、活動の内容を知りたい (C3)」「日本語を上達させ、日本の文化を理解すること、ボランティアの仕事内容を見たい (C2)」「子供に会いたい (V1)」「見たことがないので、行ってみたい (V5)」であった。

2.3 授業の内容と留学生の活動目標

本授業は 2022 年度前期に留学生を対象に開講された日本事情科目であり、週 1 回 (90 分) 全 15 回実施された。日本社会や文化への見識を広めることや、資料から得たことをまとめ発表することを通して日本語能力向上を図ることを授業目標としている。今学期は留学生の関心をもとに「子どもと日本社会」というテーマを設け、全 15 回のうち 3 回にこども食堂でのサービス活動を組み込んだ。サービス活動の流れを表 1 に示す。

授業 第5回	事前学習 ①	こども食堂の背景 ・子ども食堂を始めた経緯と目的、運営方法 ・子ども食堂が急激に全国へ広がった理由と今後目指すもの
第6回	事前学習 ②	居場所について ・留学生の事例を読み、留学生の気持ちを考える ・自分の居場所はどこか、また、そこが居場所だと考える理由 ・居場所を作る立場から見て、どんな物、どんなことが必要か
第7回	サービス活動1回目	
第8回	中間学習 と 振り返り ①	人間関係の希薄さとつながり ・人とのつながりは必要か ・どの程度のつながりが必要か ・人と人のつながりが生まれるには何が必要か ・活動 2、3 回目の目標の設定
第9回	サービス活動 2 回目	
第10回	サービス活動 3 回目	
第11回	振り返り ②	サービス活動を通して考えたこと (振り返りシート)

島崎 (2018) を参考に、こども食堂のサービス活動において、留学生が注目する点や観察するための視点を持てるように、事前学習を行った。

事前学習①では、経済的に食事ができない子どもの存在を知った店主がこども食堂を始め、「だれでも食事ができる」と対象を広げることによって、困っている子どもが来やすいように配慮されている点、地域交流拠点としての役割や課題について学習した。

事前学習②では、アルバイト先での留学生の事例を読み、居場所という言葉の意味を確認した。自分の居場所やその理由、居場所作りに必要なことは何かについてディスカッションを行った。「居場所作りには、思いやりやその人を理解するためにコミュニケーションが必要だ」という意見が多く出た。しかし、「人によってはあまり話すことが得意じゃないため、話しかけてほしくないと思う人もいるので、相手をよく観察することが大切だ」と述べた人もいた。

中間学習では、地域の課題解決に求められる、人と人とのつながりの必要性や、つながりの程度、つながりを作るためには何が必要かについてディスカッションを行った。

サービス活動 1 回目の翌週は、大学で中間学習と振り返り①を行い、留学生がこども食堂で何を行うのか各自で考え、活動目標を設定させた。留学生 6 人の目標は「子どもに自分の国のことを紹介する (V1, C3)」「子どもと話す、交流する (C1, C2, C3, C4, V1)」「子どもの世話をする (C5)」「食事の配膳や掃除などのボランティアの仕事をする (C1, C2, C5)」「私のできることをすべてやりたい (C4)」であった。留学生は、活動目標を食事の配膳などの食事のサポートや、自国の文化紹介などを行い、子どもと交流することとした。

サービス活動中は、留学生の学びや気づきを促すために、こども食堂スタッフ、こども食堂を訪れた人々の会話や様子、感じたことや考えたことを記録させ、毎回の活動報告書の提出を課した。

全 3 回のサービス活動後には、振り返りシートを用いて振り返り②を行った。振り返りシートとは、こども食堂に関わっていた人々やそこで見たり聞いたりしたこと、活動を通して意識や考えの変化を記入するものである。それをもとに、話し合いを行わせた。

また、全 3 回の活動のまとめとして、最終レポートを課題とすることを事前に知らせた。最終レポートは「こども食堂について、大学の講義・こども食堂でのサービス活動を経験し「学んだこと・気が付いたこと・意識の変化について論じなさい」とした。

3. 留学生の学びと気づき

本章では以下の3つのデータ①～③をもとに、留学生の学びや気づきについて報告し、考察を加える。

- ① アンケート調査(留学生・こども食堂スタッフ)
- ② 各サービス活動後の活動報告書(留学生)
- ③ 最終レポート(留学生):「こども食堂についての大学での授業・こども食堂でのボランティア活動を経験し「学んだこと・気が付いたこと」「意識の変化」について論じなさい」

アンケート調査は、6段階評価(1:全然そう思わない～6:とてもそう思う)の質問と自由記述形式、回答選択形式の質問があり、サービス活動前と後に2回実施した。サービス活動前のアンケートは、ボランティア経験の有無、こども食堂についての理解やサービス活動に対する意欲、関心について全15問である。サービス活動後のアンケートは、サービス活動に対する満足度や達成度、こども食堂へのイメージの変化について全13問であり、活動前のアンケート項目とは異なるものであった。

活動報告書および最終レポートを分析したところ、(1)こども食堂に対する先入観の変化、(2)交流の内容とこども食堂の意味、(3)価値観への影響、の3点が認められた。以下に、留学生の記述を引用しながら述べる。

なお、本稿では、こども食堂での活動を「サービス活動」と表記しているが、授業では「ボランティア活動」を使用していた。そのため、留学生の記述に散見されるが、同義である。

3.1 こども食堂に対する先入観の変化

サービス活動前のアンケートでは「授業でこども食堂はどのような場所であると習ったか」について、留学生6人全員が「誰が行ってもいい」「地域交流の場所」という選択肢を選び、「お金がない人が行く場所」という選択肢を選んだ人はいなかった。そのため、こども食堂が開かれている目的や役割を理解していたと思われる。しかし、活動報告書、最終レポートでは、こども食堂の環境や役割に対する先入観が変化したという記述が多く見られた。どのように変化したのかを、例を用いて示す。

C3 (環境)

専属のシェフがいたり、普通のレストランのような雰囲気かと思っていました。



・畳の構造で、中に入るとより家に近い感覚になりました。とてもアットホームな雰囲気です。リラックスした雰囲気です。

C2 (環境・役割)

公園でいくつかのテーブルがあって、その上に何種類かの食べ物が並んでいて、食べるのもよくなって、貧しい子ども、ホームレスはここに来て列に並んで食べ物を受け取り、隣にはいくつかのテーブルがその人たちに席を提供するために使われる。エアコンもなく、環境が悪いです。



初めにこども食堂に着いた時、私は驚きました。ここは露天の公園ではなく、公園にある小さな家です。しかも、清潔でエアコンもついています。

C1 (役割)

こども食堂は不思議な場所。前はこども食堂で食べる人はお金がない人だと思いました。でもそうじゃないです。

C3 (役割)

経済的に恵まれない子どもたちが食べに来ているのでは、という印象を持っていた。



・みんなが大きな家族のような存在であることに気づかされました。
・おばちゃんの話の聞いたり、自分が体験したことで「自由な場所な場所なんだ」と深く理解するようになりました。金持ち、貧乏とか関係なく誰でもここに来れば気軽に楽しく食事ができます。

C4 (役割)

食堂は生活困難や病気や身体の不自由な人々を助ける場所です。



・誰もが自発的にここに来て、彼らができることをやっている。
・みんなが自分の野菜や果物を持ち寄って、好きなものについて語り合う、地域の集まりのようなものです。

このように、こども食堂の環境について「レスト

ランのような雰囲気 (C3)」「公園 (C2)」での食事を想像していた。しかし、実際に子ども食堂を訪れ「清潔でエアコンもついている (C2)」、畳の部屋で「家に近い、アットホーム、リラックスした雰囲気 (C3)」であったことに対する驚きを示している。

また、C1, C2, C3, C4 は、子ども食堂＝貧困対策という先入観を持っていたことがわかった。しかし、活動を通して「大きな家族のような存在、金持ちとか貧乏とか関係なく、誰でもここに来れば気軽に楽しく食事ができる (C3)」「地域の集まり (C4)」と、子ども食堂の役割について考えを変化させた。

また、C4 は、子ども食堂に人々が集まることを「誰もがこのコミュニティとの関わりを失いたくないのだ。ここに来る人のほとんどは、食べるものがないから来ているのではないでしょう。」「精神的な充実が彼らが最も必要としているものです。」と分析している。中間学習で「人とのつながり」についてディスカッションをしたことで、「コミュニティとの関わり」という視点が得られ、理解が深まったのではないだろうか。

この先入観の変化には、2 つのことが影響していると考えられる。1 つは、誰が経済的に困っているかなど表面的にはわからないことである。子ども食堂には様々な人が訪れ、コミュニケーションが絶えず、いつもにぎやかであった。

もう 1 つは、新聞記者と子ども食堂代表の対話を聞いたことである。

貧困対策としての子ども食堂を取材させてほしいという記者に対して、子ども食堂代表は次のように主張した。

経済的に困っているのは子どもではなく、その親であるにも関わらず、「子供の貧困」という表現が一人歩きしている。子ども食堂は地域の様々な人が食事に来るところで、もしかしたらお金に困っているかもしれない人や、一人で食事をするのがさみしい人がいるかもしれない。しかし、それは表面的にはわからず、おいしく楽しくお腹いっぱいになって帰ってくればそれでいい。子ども食堂＝貧困対策と騒がれると、本当に困っている人が食事に来にくくなるので、「子どもの貧困」や「子ども食堂＝貧困対策」という内容であれば、取材はお断りします。

C1, C2, C3, C4, C5 は、活動報告書に記者が子ども食堂へ来た目的について記述しており、話を聞

いていたと推測できる。その対話を聞き、C2, C3 は「理解が深まった」と述べている。以下に示す。

C2

記者と子ども食堂代表の対話では、子ども食堂の目的がもっと分かりました。この問題を一面的な見方で見てはいけないことを知った。

C3

(子ども食堂は) 多くの人にとって居場所かと思えます。記者が言ったことに対する悟りです。彼の意味は子ども食堂は貧しい人が来る場所だということです。私はそうは思いません。子ども食堂代表が言ったように、これは貧困とは関係ありません。誰が来ても、食べに来てもいいです。

子ども食堂の役割や目的は事前学習①で学習したが、子ども食堂で活動し、子ども食堂を運営する人の生の声を聞き、はじめて知識として得ることができたのではないだろうか。

また、留学生 C2 は、子ども食堂に対する先入観の変化について「中国には「目で見て真実」という古い言葉があります。私たちが自分の目で見ていないときは、心の中で勝手に定義してはいけません。これも子ども食堂が教えてくれた道理です。」と述べ、実体験が大切であるという気づきを得ている。

このように、サービス活動を通して、留学生に子ども食堂についての理解を深め、実際に自分の目で見る大切さや様々な角度から考える必要性の気づきを与えたと言える。

3.2 交流の内容と子ども食堂の意味

子どもとの交流は、居場所作りのために、留学生が設定した活動目標の 1 つである。本節では、留学生と子どもの交流の内容、交流からの気づき、子ども食堂をどのように捉えていたかについて述べる。交流の内容は、子ども食堂スタッフとの交流も加えて述べる。

V1, C2, C3, C4 は、子どもに母国語でのあいさつを紹介したり、ベトナムの国花である蓮や四葉のクローバーを折紙で作ったりして交流を深めた。活動報告書には「子どもたちも私の国の位置やあいさつに興味を持ってくれた。(V1)」「自分の国を紹介できた。(C3)」「(子ども食堂の人は) 他の国の文化にもとても興味を持っています。中国の文化

を広めることができるとてもうれしかった。(C2)」と、国について知ってもらえた喜びが記されていた。

また、V1は「男の子は食事したら5時から塾に通わなければならないといった。小学生なのに、塾の授業を受けてびっくりした。」といった子どもの塾通いに対する驚きや「子供たちはなんとか自分の食事を食べ終えて、お椀と箸を丁寧に手渡してくれてありがとうございました。いいことだと思います。」と食事のマナーの良さに感心を示していた。

こども食堂スタッフとは、食堂準備を進めながら交流が行われた。V1, C2, C3の活動報告書では、自国の食卓文化や食べ物、ソーセージの作り方、畳の掃除の仕方、人柄や人間関係、偏食のある子どもへの対応、食事の盛り付け方など、国の文化、国や日本の食に関する事、こども食堂の仕事についての記述が見られた。

食事の盛り付け方については、こども食堂スタッフから指摘を受ける場面があった。C2, C3はサクランボをお皿に盛りつける際、実の部分を手で持っていた。それを見たこども食堂スタッフから「そこ(実)は口に入れるところだから持たらいけないよ。柄の部分をもって盛り付けて」と指摘を受けた。こども食堂スタッフに対するアンケートでは「食習慣がちがうと感じた。」と記述があった。両者がこれをどのように受け取ったかは不明であるが、何らかの気づきがあったと推測される。

同世代の食堂スタッフとC2は、ボランティアを始めたきっかけや学生生活、就職など個人的なことまで話し、連絡先の交換を行う様子が見られた。

活動後に実施したアンケートの質問「あなたにとってこども食堂はどのような場所になりましたか」に対して、「ごはんを食べるところ、子どもの居場所」と、こども食堂の役割を表す回答に加え「人と交流できる場所」「(自分の)家」と留学生自身にとって意味のある場所として捉える回答が多く見られた。

「人と交流できる場所」と回答したC2, V1は、その理由を「(自国の)文化を広めることができ、日本や他国の文化、言語、人々の生活習慣をもっと知ることができた(C2)」「他の人に自分の国についてもっと知ってもらいたい(V1)」と述べた。V1は「私の国について話すとき、人々はとても興奮しているだけでなく、2つの国の文化や違いに興味をもっています」と述べており、子どもたちやこども食堂にいた人々から求められ、受け入れられている

と感じたのではないだろうか。

また、「(自分の)家」と回答したC3, V1は、その理由を「リラックスできる、ストレスのない雰囲気だから(C3)」「日本では、人が他人の邪魔をするのを気にして、周りはとても静かだといつも感じているので、ここで気軽に過ごしていただけますから(V1)」と述べている。留学生は他の人にとっての居場所作りのために積極的に交流を持ったが、その交流の中で自分は受け入れられていると実感したことで、留学生にとっても「周囲を気にせず、自分を出せる」居場所になったと考えられる。

以上、こども食堂での交流と気づき、留学生にとってのこども食堂の意味について述べたが、これらの記述の多くは活動報告書からであり、活動報告書が単なる記録となっていたと考えられる。活動を通して得た気づきを、分析、考察させるための工夫が必要であるだろう。

3.3 価値観への影響

初めてサービス活動に参加したことにより、社会とつながることの大切さや人の役に立つことの幸せといった価値観の変化が生じている。以下に留学生V1, C3の記述を引用する。

V1

・国にいるとき、わたしはボランティア活動に参加したことはありませんでした。参加するように誘われたとき、わたしはそれが面倒くさいと思って、よく断ります。でも、こども食堂Xでボランティアをした時、自分は間違えていることに気づきました。ただ子供たちと遊びに来て、何を食いたいかな尋ねるだけで十分です。子どもたちはとても無邪気で気楽に話ができ、ここは賑やかなところです。私も子供のようなのんきで無邪気な気持ちになりました。

・私は自分が利己的すぎて、周りに助けになることがたくさんあることに気づかず、自分のことを大切にしているだけでした。朝は学校で勉強をして、夜はアルバイトをして、そのような悪循環で私の生活は全く同じ繰り返しています。(中略)この生活をより有意義に感じるためには、周囲の社会とコミュニケーションをとる時間が必要だと気づきました。

V1は、「こども食堂Xでボランティアをした時、

自分は間違えていることに気づきました。」と述べており、サービス活動への従事がこれまでの自分を振り返るチャンスとなっている。サービス活動を通し、助けが必要な人の存在に気づく一方で、子どもたちとの交流により子どもたちだけでなく、V1 にとっても人・地域社会とのつながりの必要性を実感している。

C3

・ボランティアや、ここに来る子どもたちとも積極的に交流しました。そして、相手に質問したりします。一番大きな学びはコミュニケーションだと思います。このイベントでボランティア活動の楽しさを体験しました。

・(私は) ボランティアでできる活動はとてもなく、経験も少ないです。先生に導かれていなければ、正直なところ、ボランティア活動には手を出さなかったかもしれません。参加したことで、自分の意識が大きく変わりました。全体を通して、人の役に立つことはとても幸せなことだとわかりました。たとえ小さなことでも、意味があるんです。子供食堂が各地で増えていくことを期待しています。私にとって子供食堂は居場所です。

C3は「一番大きな学びはコミュニケーションだ」「ボランティア活動の楽しさを体験しました」とサービス活動の魅力についても述べ、「人の役に立つことは幸せなことだとわかりました」「小さなことでも意味がある」という記述からサービス活動の意義や自己肯定感を見出していることが窺える。

学業やアルバイトで多忙を極める留学生が、このサービス活動を通して、地域の人や子どもとコミュニケーションをとり、地域社会とつながる大切さや楽しさを実体験から学んだことは大きな成果ではないだろうか。

4. まとめと今後の課題

SL は知識として学んできたことをサービス活動に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育手法である。

本稿では、SL の考え方をもとに、日本事情科目に取り入れた子ども食堂でのサービス活動の実践について報告した。

本実践では、先行研究を踏まえ、留学生が目する観点や観察するための視点を持てるように、子ども食堂の背景や居場所、人とのつながりについて大学で学習し、サービス活動を行った。より主体的な取り組みを期待し、活動目標を留学生各自で考えさせ、食事のサポートと子どもとの交流の2つとした。

その結果、留学生は子ども食堂の環境や目的、役割に対する先入観を持っていることに気づき、サービス活動を通してそれを変化させ、子ども食堂に関する理解の深まりが見られた。また、子どもたちや子ども食堂スタッフとの交流を通して、人・地域社会とつながることの大切さや、人の役に立つことの喜び、サービス活動の意義の実感が見られた。

日本語教育における SL の先行研究では、言語的側面よりも心理的側面、社会文化的側面の学習効果が報告されており、本実践でも子ども食堂の役割や目的についての学びや気づきが多く見られた。これは、留学生が子ども食堂について見聞きしたことがなく、どのような所であるかに関心が集中していたためだと考えられる。

しかし、検討すべき課題も残った。留学生が目する観点や観察するための視点を持てるように、事前学習で子ども食堂の背景や役割、社会課題について学習したが、学生の間で学びの質に差が生じた。また、交流に関する記述は行動の記録や感想に留まっている。

島崎(2018)では、授業で文化概念を学ばせ、振り返りにおいて文化概念を使い、すずめ踊りや仙台青葉まつりについて考察させており、体験を分析する観点が明確であった。しかし、本実践では、サービス活動からの学びや気づき、意識の変化についてまとめることが課題であり、事前学習で学んだ子ども食堂の役割や目的、居場所、人とのつながりという観点からの振り返りがされていなかったと考えられる。深い学びを生み、理解を深めるためには、より具体的な観点から振り返りを促す必要があると考えられる。また、最終レポートのように個人で振り返りをするのではなく、クラスで分析する観点を共有し、ディスカッションをすることも、学びの質を向上させることに有効であろう。

また、すべての留学生が子ども食堂スタッフや子どもたちとうまく交流できたわけではない。日本語使用に対する不安や子どもとのコミュニケーションに苦手意識を表出した留学生もいた。土居・井手(2015)では、中間の振り返りで、子どもとのコミ

コミュニケーションのとり方について話し合ったことで、トピックの選択や会話の始め方、進め方について改善する姿勢が見られたと報告している。ストラテジーを学ぶことは、不安や苦手意識を軽減し、一度失敗したとしても、別の方法を試すことができ、交流意欲の向上につながると思われる。

最後に、黒川（2012）はSLを「多文化共生社会の構築に貢献するための有効な教育手法」と提言している。こども食堂でのサービス活動では、留学生は食事に訪れた人々に食事を配膳し、コミュニケーションの相手となり「支援する側」に立つと同時に、その活動を通して日本語・こども食堂について学ぶ「支援される側」にも立つことになる。共生を支える「助け助けられる」自然な関係（黒川 2012）ができ、共生社会実現のために必要な共生意識を高めることができると考えられるが、今後の課題としたい。

謝辞

この実践にあたり、留学生のボランティアを快く受け入れてくださったこども食堂スタッフの方々、こども食堂にいらっしゃった皆様にご協力をしていただきました。また、本稿執筆にあたり、査読者の先生方から貴重なご教示を賜りました。皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 井手友里子・土居美有紀（2016）「サービ斯拉ーニングで学ぶ日本語コースーボランティア活動の振り返りを深めるためにー」『南山大学国際教育センター紀要』16, 21-29.
- 黒川美紀子（2009）「サービス・ラーニングが開く日本語教育の可能性ーボランティア活動をした二人の学生のケース・スタディからー」『ICU日本語教育研究』5, 3-18.
- （2012）「サービス・ラーニングの要素を取り入れた上級日本語教育の試み」『日本語教育』153, 96-110
- 島崎薫（2016）「日本文化のクラスにおけるアクティブラーニングの実践ーすずめ踊りプロジェクトでのアクションリサーチを通した一考察ー」『東北大学高度教養教育学生支援機構紀要』2, 181-192.
- （2018）「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのかー仙台すずめ踊りの実践を通してー」『東北大学高度教養教育学生支援機構紀要』4, 396-406.
- 土居美有紀・井手友里子（2015）「日本語セミナークラス Japanese in Volunteering の実践ー振り返りと気づきに焦点を当ててー」『南山大学国際教育センター紀要』15, 71-83.
- ・———（2017）「サービ斯拉ーニングを通して日本社会・文化を学ぶー日本語セミナーコース Japanese in volunteering の実践報告」『国際教育センター紀要』第17号, 39-45.
- 農林水産省（2017）「子供食堂向けアンケート調査集計結果一覧」
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kodomosyokudo-40.pdf>（参照日 2022.10.31）
- 文部科学省（2013）「地（知）の拠点整備事業（COC）」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/1346066.htm（参照日 2022.10.31）
- 湯浅誠（2019）「こども食堂の過去・現在・未来」『地域社会福祉研究』「地域福祉研究」編集委員会編（47）, 14-26.
- NPO 法人全国こども食堂支援センター むずびえ
<https://musubie.org/faq/>（閲覧日 2022年12月28日）
- Furco, Andrew. (1996) "Service-Learning: A Balanced Approach to Experiential Education", *Service Learning, General*. 128.